

オープンカレッジにおける巡検型講座の意義

— 流通科学大学“地域探訪”の記録 —

The Meaning of a Lecture with Excursion for General Citizen at Open College Program
— A Record of “Chiiki Tambo” (the Observation of Local Area)

in University of Marketing and Distribution Sciences —

白石 太良*

Taro Shiraiishi

“地域探訪”は、知られざる文化・歴史に関する講義と現地見学を組み合わせた巡検型講座で、2008～16年度の9年間に40回開講し、延べ約1,200人の参加があった。この講座では、地域文化を巡検しつつ学ぶことにより、一般的市民の学習願望の満足度を高めた。教養型の巡検は、来訪者の増加や地域文化の発信となって地域振興に寄与するとともに、生涯学習ニーズの高まりに合わせた新たなツアー形態を模索することにもなる。

キーワード：地域文化、一般的市民、生涯学習、地域振興、巡検型観光

I. はじめに

本稿は、流通科学大学オープンカレッジのプログラムとして2008～2016年度の8年間¹⁾に開講した市民講座“地域探訪”の記録をもとに、一般的な市民を対象にした生涯学習のなかで実施した巡検から考えられることについて整理したものである。この講座は、大学が所在する兵庫県とその周辺の「知られざる地域文化」を共通テーマとし、そのなかで個別のテーマを設定して教室での講義と日帰りの現地見学を各1日実施する形式であった。

巡検とは「巡回して取り調べること」(広辞苑による)の意であるが、地理学ではこれを研究・教育のための現地見学の意で用い、人びとが指導者(案内者)とともにある場所に身をおいて、自らの五体を通して地域を総合的に理解する方法の一つと位置づけられている。

もとより、一般市民が教養力向上をめざして参加する市民講座の巡検には研究という要素はない。しかし、受講者が指導を受けつつその地の自然や文化、産業などに直接ふれる点では共通するものがあり、加えて、知られざる土地を訪れるという好奇心、言い換えれば観光願望を満足させるといった側面も含まれている。したがって、少なくとも歴史・文化の分野に関わる市民講座

*流通科学大学名誉教授、〒651-2188 神戸市西区学園西町3-1

では、観光的楽しみへの期待が学びによる効果につながる。そこで以下では、学習的要素のある地域見学を教養型巡検、それを取り入れた市民講座を巡検型講座と呼ぶことにする²⁾。

巡検型講座の特徴と課題については、この講座の開始後数年を経た段階で中間的な報告をしたことがある³⁾。そこでは、バス利用に伴う諸問題や担当者の負担などの課題をはらみつつも、事前講義と現地見学の結合により大学主催の市民講座が活性化することを指摘した。また、教養型巡検は、訪れる地域の魅力発見という地域学と、いわゆる観光ツアーとの差別化といった観光学を結びつける可能性について述べた。

本稿ではこれを受け、“地域探訪”と名付けた巡検型講座を総括するとともに、教養型巡検の意味を検討してみたい。

II. 巡検型講座の特徴

1. “地域探訪”の発足とねらい

流通科学大学のオープンカレッジは、大学の特性を生かした流通・経営・情報分野のほか、歴史・文化など教養的分野を含めた市民講座として発足した。2005年ごろからは語学やスポーツ系が加わり、歴史に関して寺院・遺跡等の見学も行われた。

この流れのなか、野外見学に重点をおく講座が企画されたのは2007年秋期からである。寺院等の見学への参加者が比較的多くみられたことから、大学としては、地域を巡って現地で解説する形式の講座も開講したいとの判断であった。そこで、『兵庫探訪』のタイトルのもと「知られざる播磨」など三つの見学会が用意されたが、受講希望者が少なく開講できなかった。1日を要するという時間の長さとともに、観光行動としての日帰りツアーと地域見学に重点を置く講座との相違が伝わりにくかったのかもしれない。

そのため、焦点を地域文化において講座らしさといえる講義の要素を強め、それを自らの目で確認する巡検型の見学を組み合わせる形式に変更して翌2008年に再発足させた。具体的には、前週に事前研修を含む座学、翌週に現地見学という2日間の講座として開講し、全講座の共通タイトルは『兵庫探訪(のち地域探訪に変更)⁴⁾—かくれた心のふるさとを巡る—』としたのである。各地の地域文化から特定のテーマを設定して担当講師が行う講義と、現地に出かけて見学するとともに識者等⁵⁾から講話や解説を受ける形式の講座への変更であった。前者は地域的特性を教室のなかで学ぶ文字通りの講座、後者は学んだ事項を現地で確認する体験・研修とあってよい。

この変更により、これまで広く知られなかった地域文化を見つめ直すという視点のもと、それを一般市民の生涯学習に活かす方向性に講座の目的があることを鮮明にした。現地見学についても、いわゆる観光対象ではないが地域文化として意味ある歴史・文化資源を見学ルートに組み入れ、一般的な観光ツアーと差別化された巡検型に講座の特色をもたせた。

かくして本講座は、2008年度の第1回こそ受講者12名であったが、その後は各回とも30名の

定員⁶⁾を超える受講希望者となることが多かった⁷⁾。なお、本講座の受講者は、オープンカレッジ案内をもとに申し込まれた方々であり、その多くは60～70歳代の高齢者で（男女ほぼ同数）、地域文化に関心を抱きつつも難度の高い研究会や勉強会等は敬遠する人びとであった。

2. 巡検の考え方

“地域探訪”の講座は、春期と秋期各2回の年間4回（2012年度春～14年度秋は各3回に増えた）実施し、いずれも地域文化に関する講義（土曜日午後）とそこで取り上げた地域への巡検（終日、原則として雨天決行）の間は1週間としている。

このうち巡検について留意したのは、(1)文化機関等の主催するいわゆる歴史ウォークとの相違をはかり、(2)旅行社等による観光ツアーとも差別化する、の二点であった。

(1)の歴史ウォークは、市民が歴史・文化への関心と学習願望のもと、それを現地で学ぶ機会として参加する見学会である。そこでは、徒歩で見学地点を巡る方式をとる場合が多く、歴史的施設や文化財を中心に解説内容もやや詳細で密度が濃いのが特徴となる。したがって、それへの参加には、徒歩移動可能な体力と地域文化探求への比較的強い思いが重要となってくる。

しかし、ごく一般的な市民は、地域文化への関心は同様でも、自らの知識を少し豊かにすることに願いがあのではないか。通俗的にいえば、ちょっと物知りになる喜びとでもいえよう⁸⁾。さらに重要なのは、受講希望者には高齢者が多いため、興味はあるが体力への不安から歴史ウォークへの参加には躊躇する人びとが少なくないことであった。このような市民に向けた見学方法に正解はないが、バスによる移動と現地関係者等の説明などによって違いを求めた。

(2)の観光ツアーとの差別化は、“地域探訪”として特に重要であった。名所旧跡や伝統行事、話題性ある場所など⁹⁾、歴史・文化を見学地とする観光ツアーは多い。しかしその大半は、著名な場所に訪れる高揚感とか教科書的事物等の確認に重きをおいており、歴史・文化に関心を抱く市民には若干の物足りなさを感じる場合も少なくない。ことに観光ツアーでは、食事とか土産物に比重をかける傾向もあるため、彼らには違和感を覚えさせるように思われる¹⁰⁾。

したがって、教養型巡検で名所旧跡がルートに含まれる場合は、広く知られたことがらの背後に迫る解説などが必要であった。そこで、有名ではないが「知る人ぞ知る」とか、「知っているが行ったことがない」場所を見学地とするなどにより、参加者に新たな発見という満足度を高める方向性をもたせることとした¹¹⁾。食事などに関しても、食文化としての意味はあるにせよ、地域文化全体の見学という目的からも、それが中心になることのないのが望ましいと考えた。巡検には日帰り観光との類似性はあるが、両者は似て非なるものにとらえたのである¹²⁾。

かくして教養型巡検は、いわゆる歴史マニアとまではいえないが地域文化に関心があり、とはいえ旅行社等の観光ツアーでは物足りない人びとへ用意された見学会であった¹³⁾。

3. “地域探訪”の特徴

a. 巡検前の講義

講座のうち座学としての講義は、内容は別として、レジュメや資料類を用いるというその手法は多くの市民講座と大差はない。ただ、巡検の事前研修という意味を含むことから、学術的成果の市民向け解説といったものだけでなく、受講者の興味と関心の中心である地域文化への予備知識に及ぶことが求められる。

地域文化に関する資料のいくつかは、巡検ルートの下見の際に入手される。郷土史（誌）や報告書などがそれであるが、受講者の興味を呼び起こし意識を高めるという点で注目したのは各種のパンフレット類であった。

観光マップのほか主要な見学場所の紹介パンフレットなどは、その地を訪れた人びとに供するためいくつも用意されていることが多い。そこでこれらを可能な範囲で事前に何種類か入手し、講義時に配布したのである。パンフレット類は講義資料の一部にする場合もあるが、大半は受講者の自由活用にゆだねたのでその利用には個人差があったろう。しかし、現地見学前に写真等を目にするという行為は、配布数量が多いことと関連して、受講者の学習意欲の向上や一般的な観光ツアーとは異なる期待を膨らませたものと考え¹⁴⁾。

なお、講義時には、巡検のねらいと訪れる地域の概要、それに主要見学場所等の説明をまとめた資料を作成し、講義資料とは別に配布している。

b. 現地における講話

現地での説明は巡検の主要部分であり、“地域探訪”においても担当者の責務の一つとして行われた。しかし、その地の文化に日常的に関わる郷土史家などの関係者から直接耳にする話は、参加者に強く印象付けられて学習効果を高める。そのため、巡検時には必ず現地の識者から地域文化に関する講話や解説を伺うことにした。この場合、前週の講義に関連したことがらであるように依頼するが、話の内容が多岐に及んで時間も長く、ミニ講義となる場合もある。

これまでに講話をして頂いたのは教員、郷土史家、地域活動家、宮司、住職、行政担当者、社会教育関係者などであった。講座の当初はいわゆる観光ガイドは含めなかったが、2013年ごろから研究者等が得難い場合にはガイドを依頼することもあった¹⁵⁾。したがって、講話者の確保は、教養型巡検のさらなる展開に際して最も大きな課題になるかもしれない。なお、講話の場所は公民館や役場の集会場、寺院の本堂、神社の境内などさまざまである。

c. 下見の重要性

“地域探訪”の巡検で大きな鍵となったのは下見であった。ルートや交通事情、所用時間などバス移動に伴う基本的事項の確認だけでなく、見学場所の確定や地域文化の一面を占める郷土食

にふれ得る食事場所の決定など¹⁶⁾、下見に基づいて判断することがらは多かった。

最も留意したのは、その地の地域文化について講座担当者自身が学ぶことであった。それには学術的関心という側面はもとよりであるが、巡検時の見学事項を前もって確認するとともに、事前講義に活かすために現地で得られる出版物等を入手することも必要となる。担当者が見学場所・施設等を事前に訪れ確かめることは、教養型巡検では必須の条件である。

次いで重要なのは、参加者に配布するパンフレット等の入手、見学地で講話・説明者の確保と連絡調整であった。講座のテーマと現地での解説が整合性をもっているか、それは巡検を講座のなかでの確に位置づけるに当たって重要な意味をもっている。もっとも、直接または間接的に説明者を得難い見学地もあり、下見に合わせて市町村の文化担当部署や関係機関等を訪れ紹介を求めることになる。この場合も、見学内容についての事前打ち合わせは必要であった¹⁷⁾。

4. 巡検実施上の課題

a. 講義との関係

本講座では、講義と巡検の組み合わせが大きな特徴である。そのため受講者は、地域の知られざる歴史・文化に関心を抱き、生涯学習としてそれを学ぶとともに現地を見学する期待のもと参加されたと考えられる。したがって、講義内容と見学事項の連続性がなければその期待に応えられないわけで、現地説明者との打ち合わせが重要なことは先に述べた。それでも講座テーマと異種の解説等になる可能性もあり、巡検時は講義との関連への配慮が担当者に求められる。加えて、参加者のなかに巡検を講義と切り離された日帰り観光ととらえる人びとが含まれないとは限らず、講座のねらいが伝わる手立てが重要となる。

b. バス利用の問題点

巡検には中型バスを利用したが、その定員に合わせるため受講者数が限られ、講座に量的限界をもたらせる。また、巡検地がバスで往復できる範囲内に限られ、経費に占めるバス借り上げ代の割合が大きい、交通事故の危険性があるといった問題もみられる¹⁸⁾。さらにバス移動には、人員確認や休息時間の指示などの一般的なバスツアーと同様の用務があり、バスに限ったことではないが見学施設や食事場所等との折衝などの雑務もある。本講座ではこれらを担う職員が同行したが、それが得られない場合はどうするかも問題点の一つとなる。とはいえ、巡検を教養型に展開する効果からはバスの利用を避けることはできない。

c. 旅行業法との関係

バスの利用は、旅行業法に抵触するのではないかという問題がある。しかし、巡検は講座の一部であり、講義の延長として行われたのが巡検であった。そのため、バスツアーとして計画し参

加者を募集したのではなく、講座受講者という相互に「顔見知り」の人びとによる団体が巡検に出かけたことになる。また、バス代や昼食代を含めてその経費を参加者から直接収受することはない。すなわち、本講座の巡検は旅行業として実施したのではないが、移動を伴うという意味では一般的な団体旅行との類似性もなくはない。したがって、今後巡検のみを分離して展開するとすれば、例えそれが教養型であったとしても十分な配慮が求められる。

d. 担当者の負担

本講座では、第1回から最終回まで、受講者の募集とバス会社との連絡を除いて、講義内容や見学地の選定などの全般を筆者が担ってきた。巡検に関しては、テーマに沿った講義を前週に行い、当日は1日中拘束されて車中や現地で解説し、時には添乗員の役割の補助も務めた。これに先に挙げた下見という重要な準備が加わるので、担当者としては一般的な講座以上の責任が課せられたことは否定できない。巡検型講座においては、これらの準備と巡検時の用務が不可欠であるだけに、担当者の負担の大きさは講座の存在そのものに関わる課題といえよう。

Ⅲ. 巡検地と参加者の反応

1. 巡検地の記録

2008～2016年度に開講した“地域探訪”の講座は40回であるから、教養型巡検の実施数も同じである。講座名、巡検テーマと主要見学地は次の通りで、いずれもテーマ、見学地、ルートなどは本講座のため新たに策定し、既成の解説書・案内書は一切参考にしていない。巡検地の一部に再訪のものもあるが、その場合は見学場所の差し替えやルートの変更などを行った。

(年・月)	(講座のテーマ)	(巡検のタイトル)	(主要見学地)
2008. 5.	知られざる宝塚	もう一つの宝塚	(小浜宿・農村舞台・千苺水源地)
7.	兵庫の隠れ里	しそ森林王国を探る	(国見森公園・播磨一の宮・波賀城址)
11.	歴史ある町の魅力	小城下町そして水分け	(篠山城下・柏原陣屋・谷中分水界)
12.	東播磨のまちおこし	酒米と紙のふるさと	(杉原紙研究所・銅精錬所跡)
2009. 4.	1円電車からミズバショウへ	鉱山と養蚕のあと	(明延鉱山跡・養蚕家屋・選鉱場跡)
6.	淡路の昔と今	震災を忘れない	(震災記念館・伊弉諾神宮・砲台跡)
11.	播磨灘沿いの歴史散歩	播磨灘沿岸を巡る	(明石人発見地・室津・坂越)
12.	西播磨山間部の文化	町並みと千種鉄を訪ねて	(平福宿・たたら跡・千種高原)
2010. 5.	但馬の隠れ里	但馬牛のふるさと	(但馬牛農家・チョウザメ養殖場)
7.	猪名川をさかのぼる	猪名川流域の歴史散歩	(田能遺跡・有岡城址・多田鉱山跡)
11.	市川流域の昔と今	銀の馬車道をたどる	(馬車道跡・福本陣屋・柳田国男生家)
12.	国生み神話の世界	離島「沼島」を訪れる	(南あわじ産業センター・沼島)
2011. 5.	大阪北郊の知られざる歴史	隠れキリシタンの里	(椿本陣・キリシタン遺物史料館)

7.	有馬温泉への道	尼崎から有馬まで	(神崎泊・生瀬宿・有馬鉄道跡)
11.	但馬南部の昔と今	二つの日本最大級	(奥多々良木地下発電所・竹田城)
12.	大阪南郊の知られざる歴史	南河内歴史散歩	(鑄物師碑・黒姫山古墳・狭山池)
2012.5.	昔の播磨・新しい播磨	聖徳太子の投げ石と播磨テクノポリス	(斑鳩寺・平方傍示石)
7.	国境の歴史地理	山城・摂津境の史跡	(桜井駅跡・山崎合戦跡・長岡京跡)
10.	丹波から但馬への道	山陰への入り口	(遠阪峠・但馬一の宮・但馬国府跡)
12.	もう一つの奈良	環濠集落と寺内町	(城下町郡山・稗田集落・今井町)
2013.3.	北摂の歴史街道	北摂丘陵を探る	(城下町三田・中世石造群・木食仏)
4.	鬼の伝承と山の暮らし	鬼の里の虚と実を探る	(大江山・元伊勢社)
6.	西播磨の歴史風土	播磨史の舞台を訪ねる	(赤松館跡・上月城址・平福宿)
7.	いにしへのベイエリア	西宮～堺の旧海岸をたどる	(西宮砲台・渡船・堺旧港灯台)
10.	楠木正成の活躍	正成の足跡を尋ねる	(千早城跡・赤坂城跡)
12.	但馬の歴史と暮らし	山名宗全の世界	(出石神社・玄武洞・楽々浦)
2014.3.	近江商人の世界	近江商人のふるさと	(日野・五箇荘・近江八幡)
4.	但馬と播磨の産業遺産	二つの産業遺産	(明延鉱山・天兒屋たたら跡)
6.	播磨・備前の風土と暮らし	赤穂から備前まで	(塩田跡・備前福岡・備前焼)
7.	流通の歴史地理	鯖街道をたどる	(鯖街道記念館・熊川宿・朽木宿)
10.	剣豪の世界	柳生の里を巡る	(柳生一族墓地・家老屋敷)
2015.3.	歴史の脇役一鉄砲集団	雑賀衆と根来衆	(和歌の浦・根来寺・青洲の里)
4.	王陵の谷の歴史地理	竹内街道と近つ飛鳥	(近つ飛鳥博物館・聖徳太子陵)
6.	丹波、もう一つの顔	知られざる丹波を訪ねて	(水分れ公園・達身寺・黒井城跡)
10.	淡路島の神話と歴史	淡路島の歴史散歩	(伊弉諾神宮・自凝島神社・砲台跡)
2016.2.	北摂のクリシタン文化	隠れクリシタンの里探訪	(高山右近旧跡・クリシタン墓碑)
4.	中世大坂の自治都市	三つの町並みを巡る	(富田林・南宗寺・平野郷)
7.	東播の産業史	伝統技術の歴史をたどる	(紙漉き体験・そろばん・金物資料館)
10.	山陽と山陰を結ぶ	因幡街道の町並みを巡る	(智頭宿・流し雛の館・平福宿)
2017.2.	南淡路と沼島の風土	“おのころ島”に渡る	(淡路瓦工業組合・沼島・中宮寺)

巡検地の多くが兵庫県内なのは¹⁹⁾、受講者の大半が神戸市民（特に大学周辺）と考えられるため²⁰⁾、自らの暮らす地域（講座では兵庫県とした）の文化に接する機会をとのねらいによる。一部は近隣府県に見学地を広げたが²¹⁾、日帰り可能な範囲に限定したことはない。

これら巡検の見学範囲と見学内容による分類はすでに報告しているが²²⁾、ここでは、巡検の範囲を（i）狭い地域内を巡る、（ii）複数の地域に訪れる、（iii）移動経路に特徴がある、の三つに分けてみた。いずれが望ましいかに正解はないが、市民向け巡検としてはルート内に複数地域を含むのが望ましく、本講座の巡検の約半数がこれであった。

見学内容はすべてが複合的で、特定の地域文化を詳細に見学するという形式をとっていない。しかし、講座テーマに合わせた軽重はあるから、何を学ぶかを見学時間の長短などで明らかにし

た。内容を分類すると、回数の多い順に集落と町並み²³⁾、産業・技術史、民衆史と民俗、政治史、歴史地理、神話などとなる。ほかに、地形や社会・経済を主テーマにした見学もあった²⁴⁾。

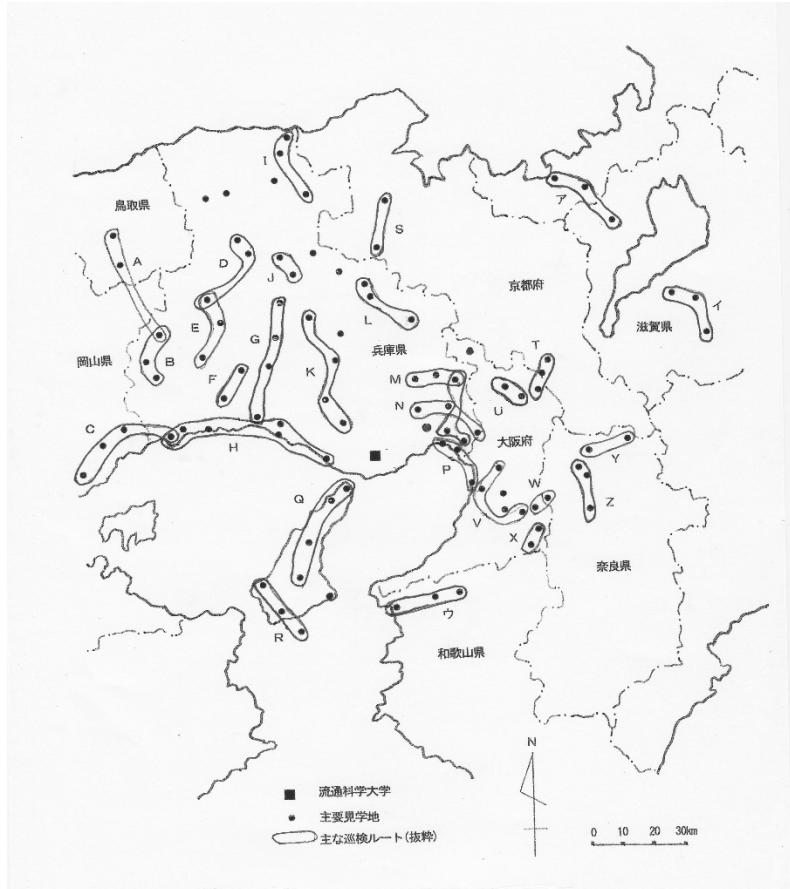


図1. “地域探訪”の主な巡検ルート（一部省略している）

巡検のポイント（巡検タイトルによるが、一部に表現を改めたものがある）

- | | | |
|--------------|--------------|----------------|
| A：山陽と山陰を結ぶ | B：西播磨の歴史風土 | C：播磨・備前の風土と暮らし |
| D：但馬と播磨の産業遺産 | E：兵庫の隠れ里 | F：テクノポリスと投げ石 |
| G：銀の馬車道をたどる | H：播磨灘沿い歴史散歩 | I：山名宗全の世界 |
| J：二つの日本最大級 | K：東播の産業史 | L：歴史ある町の魅力 |
| M：北摂の歴史街道 | N：有馬温泉への道 | O：猪名川流域歴史散歩 |
| P：いにしへのペイエリア | Q：国生み神話の世界 | R：“おのころ島”に渡る |
| S：鬼の里の虚と実 | T：国境の歴史地理 | U：北摂のキリシタン文化 |
| V：中世大坂の自治都市 | W：王陵の谷の歴史地理 | X：楠木正成の活躍 |
| Y：剣豪の世界・柳生の里 | Z：もう一つの奈良 | ア：鯖街道をたどる |
| イ：近江商人のふるさと | ウ：歴史の脇役・鉄砲集団 | |

《資料》 参加者への配布資料の例（最終回の巡検時に配布したもの ○○は略）

（2016年度秋期） 地域探訪 ～かくれた地域文化を探る～

第2回 『南淡路と沼島の風土』 - 2 -（巡検）

“おのころ島”に渡る

2017年2月25日（土） 8時15分～17時30分

【行程】（予定）

大学（発8：15）

=（着9：45）淳仁天皇陵（発10：00）

=（着10：20）土生港（発10：30）～（沼島汽船）

～（着10：40）沼島港

… 徒歩にて見学・講話（神宮寺・沼島公園・上立神岩ほか）

… 沼島港（発14：30）～（沼島汽船）

～（着14：40）土生港（発14：50）

=（着15：20）淡路瓦工業組合・講話（16：20 発）

=（着17：30）大学

▼沼島の滞在時間は昼食を含めて4時間です。ゆとりのある時間をとっていますが、徒歩移動ですのでご注意ください。歩きやすい履物をお願いします。

【現地案内・講話者】

沼島 神宮寺住職・ぬぼこの会 ○○○○氏

淡路瓦産地 淡路瓦工業組合専務理事 ○○○○氏

【昼食】

特製沼島御膳 場所○○○○ 1人 ○○円（税込み）

このメニュー名の昼食はありません。私たち用に特別にお願いしました。

【概要】

2015年秋期「淡路島の神話と歴史」の続編です。今回は本島内の神話を巡りましたが、離島“沼島”こそが“おのころ島”ではないかといわれています。日本人のルーツを海人族に求めたとき、訪れる機会の少ない離れ島に船で渡って神話のロマンに浸るのは、心躍ることでしょう。併せて、淡路を代表する地場産業の瓦の生産地にも訪れます。淡路廃帝と呼ばれる淳仁天皇の陵では下車して見学する予定です。

《主な見学箇所》

【沼島散策の見どころ】 沼島は勾玉の形をした神秘の島として知られ…（以下略）

おのころ神社、梶原五輪塔、上立神岩ほかについて説明

【淳仁天皇陵】 第47代淳仁天皇の陵。明治7年に陵として定められ…（以下略）

- (参考) 1 沼島に関して (沼島の概要、国生み神話との関わりほか) (略)
- (参考) 2 淳仁天皇について (略)
- (参考) 3 淡路瓦のこと (粘土瓦の生産、瓦生産の歴史ほか) (略)
- (参考) 4 淡路という地名 (略)

2. 巡検参加者の反応

a. 参加者の概要

“地域探訪”の受講者は、発足当初は若干少なかったものの、その後は各回とも定員30名の前後で推移したので、巡検参加者の延べ数は1,200名弱と推定される²⁵⁾。リピート率についての資料は欠くが、講座担当の事務職員によれば2~3回以上が8割、5回以上が5割に達するのではないかという²⁶⁾。そのため、個々の巡検は独立しているが全“地域探訪”を一つの講座ととらえて仲間意識が生まれ、リピーターの増加につながるという側面もあったように思われる。

受講者(巡検参加者)の居住地は、大学のキャンパスから半径10km圏内の神戸市西区、須磨区、垂水区が多くを占めつつも、東は神戸市東灘区、西は明石市・加古川市にまで及んだ。年齢では60歳代あるいはそれ以上が多く、特に男性に高齢者層が目立った。各回とも個人として参加される方が大半であったが、いずれの巡検でも数組の夫婦参加があり、女性には友人と思われるグループも見受けられた²⁷⁾。居住地は大学との近接性によるのであろうが、年齢層は地域文化への関心度とか教養型という形式が関係すると考えられる。

b. 参加者の感想から

本講座で実施してきた巡検について、参加者はどのように受け止めているのか。筆者が直接回答を得た13名に限られるが²⁸⁾、注目される事項をあげてみる。ただし、継続的に参加された方への質問であるから²⁹⁾、肯定的意見が多数を占めたことをあらかじめ断っておく。

印象に残る巡検地 各人の関心や思いは多様であり、必ずしも参加した巡検は同じではないから印象には個人差がある。そのなかで最も多くの回答を得たのは「隠れキリシタンの里」、次いで「明延鉦山」「杉原の紙漉き」であった。そのほか、中・近世史の跡(千早城、竹田城、柳生の里など)、特色ある集落(寺内町の今井町、環濠集落の稗田など)、街道の歴史(竹内街道、鯖街道など)も複数の人びとの興味を引いている。いずれも一般的なツアールートに含まれにくく個人的にも訪れる機会の少ない場所で、著名な名所旧跡ではないが、どこかで耳にしたことがあるかもしれないといったところが印象に残るようである。

長所と短所 長所としては、「事前の座学で学習して現地を訪れるのでより研究心をかきたてる」のほか、「故事来歴を事前に座学で予習できた」「事前の講義がある」「系統立てた学習コース」といった講義と巡検の組み合わせを評価する回答が注目される。「現地の人との触れ合いにより地

域文化を吸収「現地ガイドが充実」「行く先々でボランティアの説明を受けて難しい事柄も理解」を含め³⁰⁾、本講座のねらいが参加者に理解されたものとする。観光ツアーとの差別化については、「ツアーでは行くことがない地域」「入れない施設」「個人の庭園や書画の現物」などの見学ができるとの回答があり、「土産物屋との連携がない」との意見もあった。短所では、「もり沢山なのでテーマを絞り時間をかけて」「道が狭くてバスが入れず残念」がみられた。

教養型巡検への意見 「楽しみながら教養を得られる体験」として、「生涯学習の機会が少ないなか貴重な講座」であり、「主婦として行くことのない場所」に出かけて「学校で習うことのない地域の文化が身近なところに」「この地にこんな歴史があったのか」と実感する回答があった。その結果は、「これからもいろんなことに興味をもちながら学ぶことを忘れずに」の意識となって返ってくる。しかし、「教養路線は飲食、歌舞といった大人の遊びが抜ける」とか。「移動時間が長い」「地域との触れ合いをもう少し深く」「聞くだけより少し話せる場が」といった意見もある。教養型巡検の表裏が示されているといえ、今後の展開に際しての留意点となろう。

その他の感想 “地域探訪” 終了への残念な思いとともに謝辞的な回答が多く、それを総合すると、「いわゆる観光ツアーではものたりない好奇心を満足させてくれた」に表れる。「大学ならではの企画で、知らない世界を見て、聞いて、感動して、広範囲に知識を得られ、他にない学習方法と思う」とか、「子育てが終わって夫婦で近郊の由緒地を順次訪れていたが、“地域探訪”を知ってからにはこれに参加、多くのパンフレットもよかった」との感想もあった。また、「個々の事柄や場所は忘れるが、勉強になった、楽しかったは忘れない」は、高齢者が学習する意義を教えてくれる。高齢者にとっての教養は知識の豊かさにとどまらず、新たな感動とでもいうべき心の喜びや満足感にこそあると指摘されたように思え、その一つの方法として“地域探訪”が受け入れられていたことが参加者の感想からうかがえる。

IV. 巡検型講座の意義

1. 生涯学習としての巡検

仕事の最前線から退いた人びとは、こころの豊かさを求めてさまざまな形で学習の機会を望んでいる。その欲求には個人差があり学習対象も多様であるが、多数を占める一般的市民の思いを通俗的表現でいえば、「知っていることを確認した安心」と「知らなかったことを知る喜び」であろう³¹⁾。しかし、誰もがその機会を積極的に求めているとは考えられず、多くの人びとは「気軽に楽しみつつ学習できれば嬉しい」との軽い気持を抱いているものと思われる³²⁾。このなかの「楽しみつつ」に高齢者が好むことの一つである観光の要素を取り入れ、学習内容を地域文化として提供するのが教養型巡検であることは既に述べた。

地域文化に関して筆者は、宝塚市北部という限られた地域においてではあるが、ご当地検定のローカル版によりその地の地理・歴史の知識を住民に問うたことがある³³⁾。その結果、人びとは

居住地近くのことにも関わらず意外と理解していない状況が明らかとなり、まちづくり³⁴⁾には



写真1. 隠れキリシタンの遺物を見学する参加者
(2011年5月 筆者写す)



写真2. 今津灯台の説明に耳を傾ける参加者
(2013年7月 筆者写す)

住民が自らの地域を知る社会教育こそが重要と指摘した。巡検については、かつて上記と同じ地域において住民向けの見学ツアーを試みたが³⁵⁾、参加者の約半数から「住んでいる地域のことを知らなかった」との感想が寄せられ、「この歴史・文化を誇りにしたい」などの意見も少なくなかった。地域住民には、自らが暮らす地域の文化を改めて確認し、またそれまで知らずにいた知識を得ることによって生まれる感動は大きかったのである。

狭い生活領域を取り上げた上記の事例とは同列に論じることはできないまでも、例えば高齢者が楽しみに日帰り観光に出かける程度の範囲の地域文化でも、類似の傾向がうかがえるのではないか。具体的には人びとが暮らす県域内と隣接県の一部といった広がり、日常生活領域ではないが高齢者等が行楽に出かけるような範囲についてである。そこは近隣の故に親しみがあってその地域文化を知っていると認識されがちであるが、それは著名観光地にとどまっていて、実際は地名を知る程度といった場合が少なくない。だからこそ、機会があって「近くにこんな文化があるのか」を体験したとき、その喜びは大きくなるものとする。

大半を神戸市民が占める“地域探訪”受講者の言葉を借りて例をあげれば、神戸市に近い高砂市石の宝殿について「名前は知っているが来たことがなかったので良かった」の感想がそれに当たる³⁶⁾。つまりそれは、身近にありながら何らかの機会がなければふれることのない地域文化について、巡検による疑似的な旅の楽しみを加えつつ学んだことによる喜びであった。

ごく一般的な高齢者市民の学習願望は、わずかの知識の上乗せにより得られる感動への願いであり、それをさりげない行動のなかで満足させたいとの思いである。とすれば、知識の対象を地域文化におき、その文化の地に訪れて新たな感動を呼び起こすしかけとなるのが巡検であろう。付随して行われる解説や講話は、感動の幅を広げ深さをもたらせることになるといえる。

2. 地域振興への寄与

巡検によって人々が訪れることは、その受け入れ地にも影響を与えることになる。静寂のなかにたたずむ地域文化の俗化を招くとの意見もなくはないが、これまで知られなかった地に人が来るのだから賑わいづくりをもたらせることは否定できない。経済的影響についていえば、巡検時の一人の消費額は多くはないものの、地場産品の購入を楽しみとされている参加者も“地域探訪”の随所で観察することができた³⁷⁾。したがって、観光振興による活性化を望む地域の場合は、ささやかでも経済的効果があるほか、土産物を目にするによる宣伝の機会にもなるといえる。ことに地域振興の主要要素である知名度の上昇については、地域文化に感動する一般的市民には高齢者が多いだけに、口コミという素朴な伝達手段の効果が大きい。

地域振興には経済的活性化だけではなく、住民の意識や社会の変革といったものも含まれる³⁸⁾。地域のあり様はかつての「良き時代」³⁹⁾への回帰でないことはいままでもないが、これまでの歴史や文化があってこそ自己存在（地域らしさ）を主張する地域となることも事実である⁴⁰⁾。

しかし、現代の暮らしのなかで住民は、過去との決別こそが発展ととらえてかえって地域の差別化を困難にしている側面も大きい。したがって、忘れがちな地域文化の再確認は地域振興として重要であるが⁴¹⁾、それに気づかせてくれるのが地域外から巡検で訪れる人びとであろう。なぜなら、ごく一般的な市民である彼らを感動させるほどの地域文化が存在すること思い出させ、その意味を問い直す機会になるからである。このことは、何がこの地の地域らしさなのかを考えさせてくれるとともに、地域のこれからという地域振興の根幹に接近することでもある。

さらに加えて、地域文化への関心が深まるにつれ、それをより深く探求するとともに保全をはかり、また未だ知られない地域文化を発掘する機運を生む契機になることもある。大仰に言えば郷土史研究の拡大とか文化財保護の進展となるが、住民の郷土愛を深化させるという意味で地域振興の一環を占めるといってよい。

巡検によって他所から人びとが訪れることは、地域間交流のなかで受け入れ側のメリットも少なくないのである。

3. 教養型ツアーへの展開

“地域探訪”の巡検が指向したのは、広く知られていない地域文化に焦点を当て、ごく一般的な市民の学習願望に応える日帰り見学旅行であった。この方式は、参加者の多くが高齢者であることも関わって、「知らなかった歴史・文化を勉強できて良かった」と受け入れられた。

高齢化が進むとともに暮らしのゆとりとして旅行に楽しみを求める人びとが増え、その一方で何らかの生涯学習を望む声も多く聞かれるようになった。高齢者の旅行形態も団体型から個人型へと関心が移りつつある現代とはいえ、それに学習の要素を個人で加えるとなると躊躇する側面もなくはない。人口の多数を高齢者が占める時代を迎えつつあるとき、ささやかな知識の上乗せを受け身的に取り入れられ、かつそれが低額でできる小旅行、言い換えれば教養型ツアー（巡検型観光ともいえる）へのニーズが高まるのではないか。

もっとも、教養型ツアーを広く展開するにはいくつかの留意すべきことがらがある。重要なのは見学地の選び方で⁴²⁾、知られざる地域文化こそ感動を呼ぶという立場から⁴³⁾、テーマを明確にしつつ何が見学のポイントか、何を知り得る見学地かを明らかにすることが必要である。その場合、見学対象となる文化資源の粗密や受け入れ態勢なども関係するので、ツアーを企画する側の地域文化についての学識とか理解が求められることになる⁴⁴⁾。

学習という点からは、“地域探訪”で行ったような講義は必ずしも必要ではないが、解説書を作成して配布するほか、見学のなかで地域文化に関する解説・講話の時間を設定することが望まれる。解説者（講師と考えてもよい）を得るのは重要事項の一つで、見学地在住の郷土史家とかボランティアガイドとの連携が事前になされているかどうか参加者の満足度と関係しよう。これに関連するのは十分な見学時間の確保であるが、移動距離や日帰りなどの制約からも悩ましいと

ころではある。

一般的なツアーで大切な要素、例えば自由時間などは、このタイプのツアーでは二次的ではない。しかし、教養型であっても観光行動として参加する人びとが対象なので、土産物を購入するなどの時間的ゆとりは必要となる。その他、知られざる地域文化の地の見学だけに、食事場所の確保やバスの通行が可能かなど、企画段階で配慮せねばならないことがらは多い。

ここにおいて“地域探訪”は、一般的な観光コースでは取り上げにくい地域や歴史・文化資源をルートのなかに取り込んでいることから、多くの場合若干の観光的要素を加えれば、教養型ツアーに転用することができるのではないかと考える。また、そこから得られた留意点は、このようなツアーの企画の参考になるものとする。なお、ルートの改変例のいくつかについては、かつて検討したことがあるのでここではふれない⁴⁵⁾。

もっとも、教養型ツアーは文化団体等が企画する社会教育事業という見方もあり、旅行社等による商品化には多くの困難があるかもしれない。しかし、学びを求める高齢者が今後とも増えるという社会の変化のなかで、しかも多額の余暇支出には無理があるという人びとが多い状況のもとでは、そのニーズは確実に高まるのではないかとと思われる。これからの観光や旅行商品のあり方という意味でも、“地域探訪”の実践をふりかえることが望まれる。

V. まとめ — オープンカレッジを超えて —

“地域探訪”は、大学が一般市民を対象に実施した公開講座の一つとして始まった。回を重ねるにつれ多数の市民の賛同を得て定着し、終了後も継続を期待する要望がいくつも寄せられた⁴⁶⁾。

その背景には、ごく一般的な市民向け、ことにゆとりが生まれつつある高齢者層に歴史や文化、あるいは地理的なテーマの講座を提供し、講義に加えて現地に身を置いてみるという小旅行的要素を加えたことがあったのではないかと考える。巡検形式の現地見学に既成の観光地ではない場所を選定し、埋もれた地域文化を知る喜びを市民に感じてもらえたことも関係したようである。その意味で“地域探訪”が目指した巡検型講座は、一般市民の生涯学習への願いをわずかでも満足させるとともに、大学の社会貢献の一翼を担い得たものとする⁴⁷⁾。

さらに、講座で重要な意味をもつ教養型巡検は、参加者の生涯学習に寄与しただけではない。巡検によって来訪者を迎入れる地域の側にとっては、入込客の増加という経済面のほかに、地域文化を発信・発掘する契機となり住民の社会教育の機会にもなった。また、観光活動に関しては、高齢化社会の到来に伴い需要が高まるとされる文化観光に向け、教養型ツアーという学習的体験観光のモデルケースを提示することができた。

本稿はオープンカレッジ“地域探訪”の実践記録であるが、そこから得られたのは、地域文化の巡検形式による見学は一般市民の学習願望を満足させられるということであった。さらにこれと関連して、巡検を受け入れる側の地域振興とか新たな観光スタイルの可能性なども指摘し、そ

ここに巡検型講座の意義を見出したのである。もっとも、これらを教養型巡検のすべてに一般化していえるかどうかは別であり、その意味で本稿は問題提起をしたにとどまるかもしれない。これはすでに大学の公開講座の域を超えた課題であることから、その検証には多角的な事例の集積が必要になると思われる。

付記 本稿の概要は、日本観光学会第 111 回全国大会（2017 年 11 月 3 日、於くまもと県民交流館パレア）において発表した。“地域探訪”の終了後、流通科学大学生涯学習の会の協力を得て、2017 年秋に鳥取県中部の東郷荘下地中分跡、倉吉の町並み、三徳山投入堂などへの巡検を実施した。“地域探訪”受講者の参加も多く、教養型巡検の意義を確認する機会となった。

- 1) 流通科学大学のオープンカレッジは 2016 年度をもって閉講になった。
- 2) 市民対象の見学には調査・研究といった要素はないので、巡見（みまわること、広辞苑による）の語が望ましいかもしれない。しかし、学習的な目的があることや物見遊山的移動との混同を避けるため、巡検の表記を用いることとする。
- 3) 白石太良：日帰り巡検をとりいれた市民講座の試みー流通科学大学における事例からー流通科学大学論集ー人間・社会・自然編、第 23 巻第 1 号、流通科学大学学術研究会、pp.149-160、2010 年
- 4) 兵庫県域外への巡検を実施してから以降もしばらく共通テーマ『兵庫探訪』の名称を用いたが、2014 年度以降『地域探訪』に改称した。
- 5) 巡検に際しては、必ず現地の識者から講話と案内を受けている。識者には文化担当の行政職員や学芸員、郷土史家、各種団体の長などが多いが、ボランティアとして地域文化を解説する一般住民の場合もある。
- 6) 巡検に中型観光バスを利用することから、その座席数（補助席を除く）に合わせて受講定員としている。
- 7) この講座への参加はシリーズとして募集するのではなく、テーマと巡検先ごとにその都度受講者を募っている。しかし、連続して参加を希望するなど、結果的にはシリーズとしての募集に近くなっていた。
- 8) 歴史・文化が好きで関心を持っているが、「ここがあの場所なのか」とか「そこまでは知らなかった」など自らの知識の上乗せができる喜びを求めるとの意である。
- 9) 話題性のある場所とは、テレビドラマの舞台として注目を浴びた場所とか、何らかの出来事と関連して広く知られるようになったところをいう。
- 10) 観光ツアーの違和感については、本講座の巡検参加者によるアンケート回答を参照のこと。
- 11) 例えば、現在、天空の城として全国的に知られる兵庫県朝来市の竹田城には、2011 年秋の兵庫探訪（当時の名称）で訪れている。「有名観光地となる前に見学したことは自慢の一つ」との声は、何人もの参加者から耳にしている。
- 12) 買い物時間をとってほしいとの要望もあるため、時間的余裕のある場合は応えることにした。ただ、それができないことこそがこの巡検の魅力という意見も少なくない。
- 13) 筆者はこれを、「中途半端なツアー」と通俗的な表現で参加者に説明してきた。
- 14) 観光パンフレット等は一般の観光ツアーでも配布されるが、観光当日に配られる場合が多く、その種類も限られている。参加者の素朴な感想ではあるが、何種類ものパンフレットを事前に入手できるのは嬉しい

という人びとが少なくない。

- 15) 当初は筆者の知人などへ個別に直接依頼したが、それに限界があることは否定できず、間接的な依頼のほかボランティアガイドへの依頼も行うことにした。
- 16) 食は舌で知る地域文化であり、教養型巡検で重要な意味を果たすことになる。ただし、“地域探訪”の昼食代は1,000~1,500円程度を目安としたので、郷土食といっても限られる。
- 17) 下見時に直接会えない場合などは、電話あるいは郵便などで打ち合わせを行った。
- 18) 参加者全員の交通障害保険に加入しているが、40回の巡検において交通事故は皆無であった。食事場所のガラスドアに当たった怪我が1件あったが、交通事故ではない。
- 19) 地域に開かれた大学という流通科学大学のコンセプトとも関係している。
- 20) 大学主催の市民講座では、広報の可能範囲が限られるほか、大学までの移動時間への配慮が必要である。
- 21) 神戸市民からみれば県外ではあるが、近隣府県なので地名は知っているも訪れる機会がなかったという場所を見学地に選んだ。
- 22) 白石太良：流通科学大学オープンカレッジ“兵庫探訪”の巡検ルート 流通科学大学論集－人間・社会・自然編、第25巻第2号、流通科学大学学術研究会、pp.107-120、2013年
- 23) 見学地として最も多かったのは城下町、宿場町、港町、寺内町などの町並みであった。
- 24) 地形は断層や分水界、社会・経済はまちおこしや各種施設などである。
- 25) 体調不良などにより巡検当日の不参加もあるが、オープンカレッジ事務局の記録によれば延べ1,165名となっている。
- 26) 筆者の理解では、第1回から参加され、合計35回ご一緒の方が最多であった。
- 27) 女性には、本講座に参加されたことを契機に知り合いになられたと思われるグループも見受けられた。
- 28) オープンカレッジにおいても「授業評価」的な調査は必要かもしれないが、個々の巡検ごとの評価は特に調査していない。“地域探訪”終了後は受講者全員へのアンケート等は困難なため、私的に協力が得られる範囲で意見を求めた。このうち、詳細な回答を得たのが13名であった。
- 29) 回答者はすべて、40回の“地域探訪”のうち5回以上の参加者であった。20回を超える参加も半数を占めている。
- 30) 参加者にはいわゆる観光ボランティアと郷土史家などの研究者との区別が困難な場合もあり、すべてをガイドの語で表現している。
- 31) 求める学習にはいわゆる趣味から本格的な研究まで含まれるが、一般的市民の多くはそのいずれともいえない程度のもので、通俗的表現でいえば「ちょっとした勉強」への願望ではないかと考えられる。
- 32) テレビのクイズ番組に興味を示す高齢者が少なくないのはその表れの一つである。
- 33) 白石太良：ローカルなご当地検定にみる住民の地域意識－宝塚市北部における“西谷検定”の事例から－兵庫地理、第61号、兵庫地理学協会、pp.41-50、2016年
- 34) ここでいう「まちづくり」は、経済的活力を基準にした地域活性化やまちおこしの意ではない。それは、社会・経済の変化のなかでみられる価値観の多様化や生活行動の個人化に伴い人びとが見失った地域社会のまとめ、あるいは人びとの絆の再構築を図る、という意識のもとで進められる社会活動をいう。
- 35) 白石太良：教養型巡検ルートの開発と「まちづくり」－阪神北部の実践から－兵庫地理、第60号、兵庫地理学協会、pp.67-73、2015年
- 36) 石の宝殿は生石神社のご神体で6.4m×5.7m×7.2mの巨石。大穴牟遲神と少名毘古那神に因む伝説が残される。ほかにも、「近くまではよく来るがここには来たことがない」(妻入り町屋が続く篠山市河原町)、「淡

路にこんな文化財があるとは」(旧海防砲台跡の洲本市生石)などの感想が象徴的である。

- 37) “地域探訪”は土産物購入などをルートに入れていないが、そのための時間を要望する声も耳にした。学習を主目的としながらも、買い物も楽しみという一般的市民の願いと関係していると思われる。
- 38) 地域振興には、経済至上主義のなかで見失われた人間関係や心の安らぎをとりもどし、「ここに暮らして良かった」と思える地域を構築するという意味も含まれる。
- 39) 「良き時代」とは感覚的かつ抽象的表現であるが、人びとが懐かしみまた回顧する時代をいう。個人差はあるが、地域社会のまとまりを感じていた時代というような意で用いた。
- 40) 自己存在(アイデンティティ)は、その地域が他と差別化されて独自性を主張しようとの意で用いている。平易に表現すれば「地域らしさ」となる。
- 41) 前掲 33) 参照。地域住民は、年中行事などを除けば、地域の歴史や文化を知らなくとも日常の暮らしに支障はないと考える傾向がある。
- 42) 著名な名所旧跡などをツアールートから外した場合、集客に影響するのではないかという懸念もある。
- 43) 過激な表現を用いていえば、全国区の文化よりも土着の文化にこそ魅力があるという意味である。
- 44) 企画者がその地の地域文化を理解していなければ、企画自体が立案できないのはいうまでもない。わかりやすい例でいえば、地域の村祭りなど日時や季節と関わるものへの対応がそれである。
- 45) 前掲 22) 参照。
- 46) 大学の主催ではない形で、自主的活動として継続できないかなどの意見である。しかし、世話役をどうするかなど現実的な課題もあって、一部の同好会的見学会を除けば実現には困難が伴う。
- 47) 大学の社会貢献になったかどうかは参加者の多少で論ずるというものでもなく、定量的に検証することが困難であろう。しかし、参加者から高評価を受けたとすれば顧客満足度が高かったのであるから、定性的には社会貢献をしたとあってよいと考える。